『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会） 第５巻　第３号　2003　151頁～153頁

＜書評＞

大塚柳太郎、河辺俊雄 他著『講座 生態人類学５ ニューギニア―交錯する伝統と近代―』
(京都大学学術出版会、2002刊)

小　谷　真　吾

＜Book Review＞

Ryutaro OHTSUKA, Toshio KAWABE *et al*.: Ecological Anthropology 5 New Guinea ーBetween Tradition and Modernityー

Shingo ODANI

生態人類学は、環境と人間の相互関係を記述していく学問分野である。その目的は、人間集団の多様な活動や身体的特徴をエコシステムの中で解釈していくことであり、その方法論も歴史性よりむしろ構造と機能に着目するシステム論的立場をとっている。しかし現在のアカデミズムにおいてシステム論が実体論にすぎないという批判があるのと同期して、生態人類学においてもその拠り所としているエコシステムの実体性は、保証されているとはいえない。実体論による解釈は、システムが閉じた物、つまり境界が明らかな場合に認識の枠組みとして有効なものであると考えられるが、現在のグローバリゼーションにおいて事物の越境に対する認識の枠組みが求められている中で、現象論による解釈が主流となりつつある。エコシステムの概念を使用して環境と人間の相互関係を分析している生態人類学は、生態学的に構成されている事物を記述することにおいて、グローバリゼーションをはじめとする現代的な要請に答えていけるのであろうか。このことを「講座生態人類学５ ニューギニア－交錯する伝統と近代－」を材料に考えてみたい。ニューギニアは、マリノフスキーやラパポートの研究等、システム論を成立させる数々の事例の対象となった地域であり、エコシステム概念を再考するのにこの本は最適な素材であるといえる。

この本は、生態人類学の第一線で活躍する研究者が、彼らの研究のエッセンスを凝縮する形でフィールドワークに基づいた事例を著した書である。序章及び第１章は、ニューギニア全体についての俯瞰図が描かれている。しかしそこに描かれているのは、際限なき多様性であり、ニューギニアという全体はシステムとして存在していないことが示されている。つまりシステムは後の章で描かれる

細分化された各地域にしか存在しないということである。それは国名である「パプアニューギニア」ではなく、地域名である「ニューギニア」が本の題名になっていることからも明らかなことであり、生態を記述していくのに、国家や植民地支配といった歴史性あるいは政治性は考慮する必要がないという前提が見られる。

では各地域のシステムはどのように記述されているのか。まず第２章において、沿岸部ギデラの生業生態が描かれている。サゴデンプン精製と採集狩猟を中心に生業を構成しているギデラと、その背景に存在しているニューギニア低地地域の環境条件に関する具体的かつ詳細な記述は、エコシステムが実体であることを、読者に対して強烈に印象付ける。実はこのように完全とも思えるシステムに対する分析は、この章の筆者、大塚柳太郎氏の初期のフィールドワーク、及び彼の所属する東京大学人類生態学教室が中心となって行なわれた学際的フィールドワークの要約であり、ニューギニアにおけるシステム論の精華を求める読者は、彼らの著書も参照なされたい。

山麓部クボに関する第３章、高地辺縁部オクに関する第４章は、エコシステムと社会システムの関係性についての定量的分析が論述の中心となっている。第３章では社会システムがエコシステムを規定している事例が、一方第４章ではその逆の事例が描かれている。この二章においては、あえて二つの視点を提示し、比較できる形にしているというのが筆者及び編者の意図であろう。読者はそこからニューギニアのさらなる多様性を読み取るべきである。生態を現象学的に捉えていく際にも、生態学的現象と社会的現象の関係性は無視できないものであり、その関係性に関する研究はこれからも深化させていく必要がある。

さて近代化というシステム外からの要因によってシステムが変容しつつある過程は、これまでの章でも少しずつ触れられてはいるのだが、その変容が中心的に論述されているのが、高地地域フリに関する第５章、島嶼部マヌス州に関する第６章である。まず高地における分析においては、システム外からの要素であるサツマイモの導入と近代化によって、システム内における人口及び生業生態が変化する過程が詳細に分析されている。ただしなぜそれらの要素がシステム内に入ってきたのか、つまりなぜ人々がそれらの要素を求めていたのかは考察されない。ここに表現されているのは、外部からの影響は不可避かつ非意図的なものであり、内部はそれによって変わらざるを得ないという図式である。システムの概念を使い続けるのならば、このような分析方法が唯一の方法論であろう。このようなアプローチが必要でない訳ではない。人々が依然、システムの中にいるものであると内面化しているのならば必要であり続ける。しかし例えばフリという枠組みがもはや存在しないものであるとしたら、やはり必要性に限界が出てくる。

まさにそのような状況が、第５章の島嶼部において描かれている。この章における記述は、何々族という分類ではなく、何々州何々島といった地理的名称を以って主な対象としている。またパリアウ運動という、外部からの要素に人々が政治的に対応していった過程も述べられている。つまりこの章の対象者たちは、世界や国家と直接的かつ主体的に関係を持ち、開かれたシステムを構成するものとして論じられており、実際、文中にもそう表現されている。そこにおいて、世帯の戦略に

対する分析が中心となっており、システム全体に対する分析は影が薄くなっている。

以上、「ニューギニア　－交錯する伝統と近代－」を読み進めてきたが、すでに近代化などの外部からの影響なしにエコシステムを記述することは不可能であると考えられる。そしてシステム概念成立の根源であったニューギニアでこのような状況にある以上、地球上全ての地域において生態人類学は、そのパラダイムを再考する時に来ているのだろう。ではポリティカルエコロジーのような現象学的アプローチが、選択すべきパラダイムであろうか。人々を個人あるいは帰属意識という点で対象とし、政治や歴史を人間の生態学的側面に対する決定要因とするというのは、正しい選択というよりも現状認識として仕方ないことのように思える。しかし現象学的研究であっても、この本において筆者らが行なった定量的な分析は不可欠であり続ける。丁寧に細部における動態を記述していくしか、環境と人間の相互作用を明らかにする方法は存在しないだろう。

（おだに　しんご・国立歴史民俗博物COE研究員／高崎経済大学非常勤講師）